

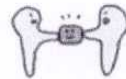
ライス通信

第2号

2002. 10月
発行

RISE

リヴォルヴ学校教育研究所
REVOLVE Institution
for
School Education



ADHDだと言われた子

「悪いことをしたな」と言えば「はい」とうなずく子が、「あなたは自分がイライラしたからといって、ガラスを割って友達をケガさせるようなことをしておいて、それで平気でいられるなんて！自分がどんなことをしたかわかっているの」などと言われると、「わかんねえ」と言ってそっぽを向く。大人にしてみれば、その態度は反抗的以外の何ものでもないと思えるだろう。しかし彼にしてみれば、そのまわりくどい表現が理解できずに、いらつき、ただ単純にわからないから、「わからない」と言っているだけのこともかもしれない。

「初めてのボーリング」

「お子さんはADHDだと思います。今は良いお薬もありますから、服用されてはいかがですか」

クラス担任からの突然の言葉に、母親はすっかり混乱してしまったという。

少女の父親は私の旧友だった。しばらく話をした後、両家族でボーリングに出かけた。初めてのボーリング。私は一つだけ彼女に注意をした。

「二人が同時にボールを投げたらどうなる？」

「あぶない！ じゃまになる」

「そうだ。そうだね。――それにほら、あそこでボールとボールがごっつんこしたら――」

「うん？ ボールがつまっちゃう」

「だよ。そしたらさ、隣の人が先にボールを投げようとしていたら、レーンには立たずに待ってよう」

「うん！」彼女は元気良くなすいた。

小さな体に大きなボール。もちろんスコアにはGのマークが並ぶ。涙ぐんで、

「もうやだ、やめる」と言い出した彼女だったが、何とか励まされて続ける内に、ついにボールはヘッドピンに。

ゲーム終了後、「いつもこんな調子で……」と



ライス学園のみんなは、今、ソフトテニスにハマってます！

言う母親に、私は

「今日はほめてあげましょう」と言った。

ブービー賞を手にして照れくさそうにしていた少女は、終始、隣のレーンへの気配りを忘れなかった。そこからは、「時と場をわきまえずに、突然大声を上げたり、ちょっとでも気に入らないことがあると、まわりの子の勉強をじゃまし始める」という学校での姿は想像が難しかった。

「ほめることの難しさ」

ほめることの大切さは誰でも知っている。しかしそれが意外と難しい。私たちは、自分もかつては子どもであったことを忘れがちだ。宿題などほとんどやっていなかった私が、教師になると

「宿題はやって当たり前。どうしてこのぐらいのことができないんだ」などと説教する。また、海水浴に行っても、波が恐くて海に入ることさえできなかった私が、

「なんだ。これぐらい平気だろ。弱虫だな」と幼い我が子を笑ったりする。

ところが、ひざを折って子どもの高さを目線を合わせてみると、これが結構怖い。私は今でも、期限を守って仕事をすることが苦手だし、海でも決して足がつかないような深みには行かない。

(2 ページに続く)

目次	ADHDだといわれた子	1, 2	ライス学園生徒募集のご案内	7
	ライズの活動紹介	2	ライス学園日記	8, 9
	レポート 教育公開講座	3, 4, 5	スタッフのつぼやき	9
	地域ポータルサイト	6, 7	ADHDセミナー・会員募集のお知らせ	10

「学校教育がADHDを生み出す」

「実際に苦情もきているんです。まわりの子ども達にも迷惑になりますし、何よりお子さんのためになると思いますよ」

驚いたことに、この担任教師は「大丈夫です。他にも薬を服用している子がいますから」と複数の子の実名をあげたと言う。

たしかに、薬の服用がその子にとってプラスになることはある。しかし医学的な知識をもたない教師が、安易に「LDです」「ADHDです」などと口にしたり、ましてや薬の服用をすすめるなど、決してすべきことではない。

少女が本当にADHDなのかどうか、私には判断できない。しかし仮にそうなのだとしても、彼女らは周囲がほんの少し接し方を変えれば、思わぬ力を発揮するかもしれない子ども達なのだ。

学校教育がADHDやLDを生み出している、との指摘もある。もともとそうでなくとも、学校という特殊な環境下で、周囲の無理解が同様の状況へと子ども達を追い込んでいるということも考えられなくはない。

全国的にも有名なあるフリースクールの代表は、「十何年もの間、大勢の子ども達を見てきたが、私達のフリースクールにはADHDの子どもなど一人もいない」と言い切った。その発言をそのまま支持することはできない。しかしその発言は、重要な示唆を含んでいると私は考える。ADHDだと言われたあの少女は今、新しいクラスでのびのびと、そしてすいぶんと落ち着いて学校生活を送っているという。

(文責 リヴォルヴ学校教育研究所代表 小野村 哲)

ライズのあしあと 最近のおもな活動をまとめてみました

平成14年3月	<ul style="list-style-type: none"> ・国土交通省主催「つくばポータルサイト対話集会」のパネラーとして参加 ・第1回ADHD・LDセミナーを開催 参加者約120名 ・チャータースクールフォーラム（特別講演ジョン・ネイサン氏）に参加 ・NPO法人えじそんくらぶ主催ADHD指導者養成セミナーに参加（埼玉）
平成14年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・水戸こども劇場主催「子どもたちと性を語るために」に参加
平成14年5月	<ul style="list-style-type: none"> ・定時総会を谷田部圏民センターにて行う ・スタッフによるADHD講座を同時開催
平成14年7月	<ul style="list-style-type: none"> ・「これからの教育とコミュニティ」常陽新聞に連載開始 ・菅間小学校、山口小学校 家庭教育学級にて講演 ・EDGE・えじそんくらぶ合同主催「ディスレクシア/ADHDの理解と支援」 (六本木)へ参加 ・チャータースクールフォーラムVOL.2（特別講演ディー・トーマス氏）へ参加 ・星の子主催勉強会で講演「英語学習につまずきがちな子ども達への支援」 ・神奈川LD協会主催ADHD/LD講座指導者セミナー 「読み書きの困難を示す子どもの理解と支援」参加（横浜） ・国際交流会「米国におけるサービス・ラーニングの展開と子どものNPO」参加
平成14年8月	<ul style="list-style-type: none"> ・茨城県企画課主催 教育座談会に参加 ・国土交通省 西澤氏来訪 「つくばポータルサイト」について意見交換 ・国土交通省 ポータルサイト検討委員会に参加
平成14年9月	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人 EDGE（エッジ）訪問（六本木） ・NPO法人 GNC（グローバルネットワークフォーチルドレン）訪問（霞ヶ関） ・コモンズ主催 NPOのための研修交流プログラム プレゼン大会参加 ・コモンズ主催 NPOスクールにて 地域通貨について発表 ・日本こどもNPO設立総会参加（青山） ・日本LD学会参加（明治学院大学）

レポート 教育公開講座
『ADHD、LDの子ども達への理解と対応』
2002. 3. 2 講師 高山 恵子さん えじそんくらぶ代表



じっとしてられない。集中力がない。忘れ物が多い。集団の中でうまくいかない。その他、一部の能力に極端な落ち込みがある子。対応が難しい子。そんなお子さんが近くにいませんか？ 彼らは、少しだけ大人が対応を変えれば、素晴らしい才能を發揮する子どもたちかもしれません。すべての子どもたちが生き生きと毎日を過ごすために、私たちに何ができるかを、ADHDやLDの子どもたちへの理解を通して一緒に考えてみませんか。今回の教育公開講座には、そんな呼びかけに応じて、定員をはるかに上回る方々からのお申し込みをいただきました。

講演を聴きながら改めて考えさせられたのは、「違う」ということが、何を意味するのかということでした。高山さんはその著書「ぼくたちのサポーターになってII」の中で、「ADHDという障害よりも、ひとりひとりの違いを受け入れ、尊重することの大切さを理解していただくほうがむずかしい」と述べています。日本語における「違う」は、「間違い」や「違反」につながるなど否定的な意味合いが強い言葉ですが、アメリカの学校では” Be different” 「違う存在であれ」とも教えられます。高山さんはここに、アメリカの教育現場と日本の教育現場の大きな違いがある、と指摘します。

日本にもかつて、「大器晩成」という言葉がありました。大器といわれた人々は、人とは違った視点を持ち、異なったものの考え方ができる人でもあり

ました。それが今では死語になりつつあると感じているのは、私だけでしょうか。「みんな違って、みんないい」最近よく耳にする言葉ですが、この言葉の意味が表面的ではなく本当に理解されたなら、LDやADHD等の障害をもった子ども達、または何らかの理由でそれに類する状況にある子ども達が二次的な情緒障害に陥ることはずっと少なくなるはずで

◆ ADHDとは

ADHDとは Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder の略で、日本語では「注意欠陥多動性障害」と訳されています。原因としては、脳の働きに何らかの問題があると考えられていますが、現段階ではまだはっきりと解明されていません。また、ADHDと診断できるのは専門的知識を持った医師のみであり、安易な素人判断は厳に慎まなければなりません。ADHDやLDへの対応の難しさとして、その障害が見えにくいことがあげられます。しかしその一方で、安直に「あの子はADHDに違いない」と決めつけたり、「お※1子さんはLDかもしれません」などと伝えることは、ネグレクトなどの虐待、睡眠障害、朝食を食べてこないなど生活のリズムの乱れ、アレルギーや低体温などの内因的要因などが原因でADHDやLD様の状態にある子(人)を、かえって良くない状態に追い込んでしまうこともあるからです。

主な症状としては「不注意」、「多動性」、「衝動性」があげられます。ADHDというと、すぐに「落ち着きがない子」といったイメージがありますが、①多動のないタイプ=注意欠陥(ADD)と、②多動、衝動のあるタイプ=多動(H)と、③その両方をもつタイプ(ADHD)などに分けて考えることもできます。

ADHDへの誤解も数多くあります。例えば、マスコミ等で騒がれている「キレル子ども」、学級崩壊などの問題もADHDやLDと結び付けられがちです。また、親のしつけ不足を原因として指摘する傾向もあります。周囲の無理解や誤解によってADHDが進むことはあっても、親のしつけが原因で、ADHDやLDになることはありません。

※1
ネグレクト……遺棄、衣食住や清潔さについての健康状態を損う放置(栄養不良、極端な不潔、怠慢または拒否による病気の発生、学校に行かせないなど)をいう。

児童虐待調査研究会(1985年)による児童虐待の定義より

◆ ADHDをもつ子への対応

現在、ADHDの出現頻度は3~5%程度と高く、通常1クラスに1名はいる計算になります。そのため教育現場での適切な対応が求められています。では、実際ADHDをもつ子どもに対してどのような対応をしたらよいのでしょうか。高山先生はその対応の仕方として、「セルフエスティーム」、「共感」、「システム」の三つをキーワードとしてあげられていました。

① セルフ・エスティームを高める

セルフ・エスティームとは、「性格・長所・弱点・障害・特徴・特技・外見など、自分のすべての要素をもとにして作られる自己イメージに対して、自分の価値を評価し、自分を大切にしようと思う気持ち」で、日本語では「自己評価」「自負心」といった言葉に置きかえられますが、びたりと当てはまる訳語はないようです。

ADHDをもつ子どもは、一見ただけではわかりにくいのに、皆が簡単にできることができないので、自分は価値のない人間だと思い込み、自分を大切にできず、努力して自分を向上させようとする気持ちが弱くなりがちです。ADHDをもつ子どもは私達が思っている以上にセルフ・エスティームが低くなりやすいのです。セルフ・エスティームが低いと、二次的情緒障害を引き起こしやすくなります。不登校や非行などの非社会的、反社会的行動にいたることもあります。逆にセルフ・エスティームが高いと、子

どもはその可能性をどんどん開花させていきます。自分は価値のある人間だと思えるので、注意も素直に聞き入れ自分を向上させようと思うことができるのです。

ADHDをもつ子どもに関していえば、違いを理解し、違いを尊重し、長所を認めることが一層重要となります。

セルフ・エスティームとは自分に対する自分自身の評価です。他人からの評価ではなく、自分自身の評価が育たない限り、本当の支援にはなりません。またマズローによれば、人の欲求にはいくつかの階層があるということです。「どうしてこの子はやる気がないんだろう」という前に、セルフ・エスティームを満たす工夫が必要です。

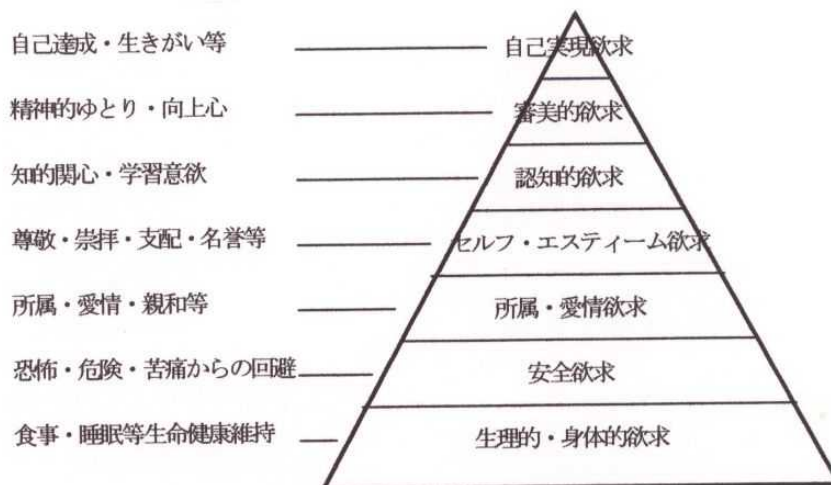
② 共感する

感情には必ず原因があり、行動のもとには感情があります。子どもの問題行動について考える時、まずは行動のもとにある感情に共感することが大切です。共感とは、相手の気持ちをとともに感じること—相手の感情に焦点をあて、その感情をあらわす言葉を口にだすことです。高山先生はこれを公式化しています。

「共感の公式=感情の原因+だから+感情をあらわす言葉+なのね」「~だから~なのね」

ADHDをもつ子どもの気持ちは複雑で、その気持ちを言葉で表現することは難しいでしょう。それゆえADHDをもつ子どもは問題児と見られることが多く、なかなか理解が得られません。だからこそ相手の気持ちを理解し共感することが必要なのです。感情を言語化して言葉かけすることで、子どもは自分の気持ちを理解してくれたことを実感し、相手を信頼することができます。信頼関係が築けてこそ、よいサポートができるのです。

マズローの欲求の階層
(欲求は下から順に満たされていく)



③ システムをつくる

ADHDをもつ子どもは、物の整理だけでなく、時間、情報すべてのコントロールと管理が苦手です。これは、脳にいろいろな情報が入ってきたとき、その情報をうまく集約して効果的な行動をとる働きが他の子どもと比べてうまくできないからです。しかし、その子にあった具体的なシステムを提供し(外部からの動機づけ、計画表やチェックリストを作る、行動を促すサインを作る、言葉で指示するだけでなく内容を視覚化する等)、それを維持しサポートをしてあげることによって問題を軽減することは可能なのです。

当日の質問から

◆ 保護者への対応

ADHDかと思われる場合、教師はどのように保護者に伝えたらよいのでしょうか。先ほど述べたようにADHDの判定は難しく、安易にADHDと決めつけるのは避けなければなりません。かといって、適切な対応がなされないままでは、症状を悪化させるばかりか二次的障害を引き起こす恐れもあります。

子どもに対する場合と同じですが、まずは保護者とよい関係を築くことが第一です。教師と保護者が子どもの様子について情報を交換し合う、その過程で学校での様子を具体例を挙げて話したり、さりげなく情報を提供したりなどの対応をしてみるとよいでしょう。よい関係を築いてから正しい理解をしてもらうことが子どもにとっても保護者にとっても大切なことなのです。また、子どもの行動をチェックする際には、一人で行わずに必ず何人かの教師で観察するようにします。多くの正確な情報を集めることが、その子にあった対応を考えるうえでも大切なことなのです。

◆ 「違い」を受け入れる

「ADHDをもつ人」と「もたない人」とでは、それぞれ認識や行動のしかたなど多くの「違い」があります。しかし、「違い」は共感・理解することによって「個性」になります。お互いの立場を理解しあい、共感しあい、そして歩み寄ることが大切なのです。学校や家庭はもちろん、子どもをとりまく社会全体でよいサポート体制を作っていくことがADHDをもつ子どもにとって今一番求められていることではないでしょうか。ADHDにある多くの特徴は、正しい理解とサポーターの存在で素晴らしい才能になっていくのです。

(文責 リヴォルヴ学校教育研究所学園スタッフ 北村直子)

ご好評につき
再度、開催
いたします。

ADHD・LDの子どもたちへの理解と対応

「じっとしていられない」「忘れものやなくし物が多い」その他、一部の能力に極端な落ち込みがある子。対応が難しい子。そんなお子さんが近くにいませんか？ 彼らは、少しだけ大人が対応を変えれば、素晴らしい才能を発揮する子どもたちかもしれません。今回は、みなさまからのリクエストにおこたえして、ふたたび高山恵子先生をお招きしました。すべての子どもたちが生き生きと毎日を過ごすために、私たちに何ができるかを、ADHDやLDの子どもたちへの理解を通して一緒に考えてみませんか。

日時 平成14年12月15日(日)
場所 つくば国際会議場 406号室
茨城県つくば市竹園2-20-3
講師 NPO法人えじそんくらぶ
高山 恵子 氏
時間 14:00~16:30
参加費 一般 1,000円 学生 500円

お申し込み すでに、大勢の方からお申し込みをいただいています。参加をご希望の方はこの宮事務所まで電話・FAXメールのいずれかでお申し込み下さい。
(お名前、ご住所、お電話番号を明記下さい)

※大変申し訳ございませんが、今回は都合により、託児室は用意してございません。